

「小学校低学年におけるメディアリテラシー育成について」

～テレビ放送に関するアンケート結果から～

鳥取県教育センター 情報教育課

長期研修生 長谷川喜丈

1 はじめに

テレビ等の映像メディアは、我々の生活に密着している。しかし、子どもたちはその見方や内容についての吟味を行うことが可能なのだろうか。テレビには心を豊かにする番組、知的好奇心を満足させる番組などたくさんのよい面を持つ。一方、暴力や人権の問題、過度に消費を促すのではないかとと思われるようなコマーシャルなど、たくさんの負の部分も持っている。日本小児科医会は2歳までのテレビやビデオ視聴を控えたり食事中、授乳中の視聴をやめるように提言している。幼児は保護者の管理下に置けるが、小学生は自らの意志でテレビやビデオを見、ゲームを行う。十分な判断力を育成していかなければそれらメディアからの情報を鵜呑みにしてしまうのではないだろうか。

2 研究の目的

子どもたちがいちばん接触時間の長いテレビ等の映像メディアについて、学校の取り組み、子どもたちの様子、家庭での状況等を調査し、実態を把握するとともに、メディア・リテラシーの育成について考察する。

3 調査の概要

鳥取県下6小学校の教諭92名、第2学年児童343名、保護者344名から回答を得た。

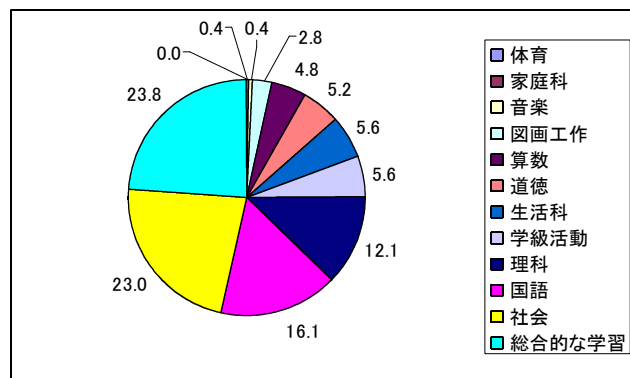
○教員の実態

情報教育に係わる授業の実施率

授業実践があることがら	授業実践があまりされていないことがら
新聞作り (87.1%)	インターネットの情報についての分析評価 (15.5%)
コンピュータを使う (85.1%)	テレビ番組についての分析や評価 (9.8%)
コンピュータの操作法 (82.6%)	

「情報関係の授業をどの教科、領域で扱っているますか」

- ・総合的な学習の時間、社会科、国語科、理科での実践が多い。
- ・体育科は0人、家庭科と音楽は各1名でほとんど実施されていない。



○児童の実態

基礎的データ

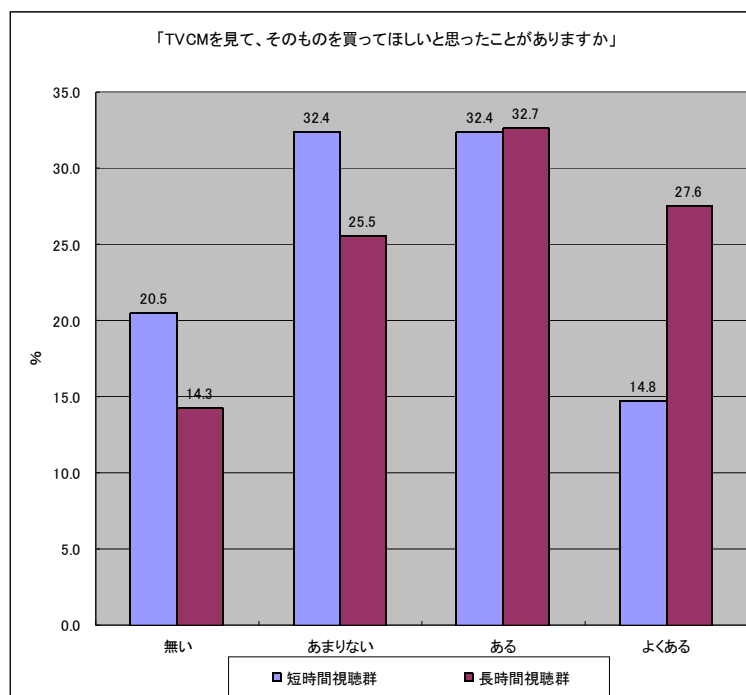
1日平均のテレビ視聴時間	95.7分(平日)	95.6分(休日)
1日平均のゲームのプレイ時間	54.2分(男子)	39.2分(女子)
最長映像メディア接触時間	6時間以上が2名	
テレビCM接触時間	約6分間(CM本数24~30本)	

年間の授業時数を1日平均すると2時間強であるので、テレビの視聴時間2時間を境にして児童を長時間視聴群と短時間視聴群に分け比較した結果以下のことが分かった。

- ・テレビの見方について家族と話し合っているのは長時間群で44.9%、短時間群で64.1%となり、話し合いの有無でテレビを見る時間に変化があることが分かる。
- ・テレビがないと困ると答えた児童が長時間群で57.1%、短時間群で44.5%と、テレビの長時間視聴がテレビへの依存の度合いと関連性が見られた。
- ・長時間視聴群の方がゲームの使用時間が19.5分長く、テレビをよく見る児童はテレビゲームをよく使用することが分かった。
- ・PCのゲーム利用も長時間群が10ポイント以上高く、反対に、学習用ソフトの利用は15ポイント低い。コンピュータがゲームマシン化している。

質問「テレビCMを見てそのものを買ってほしいと思ったことがありますか？」への回答は右のグラフである。

・長時間のテレビ視聴がCMの見方に影響を与えている。長時間テレビを見ることでテレビコマーシャルへの接触も増えるためかと思われる。

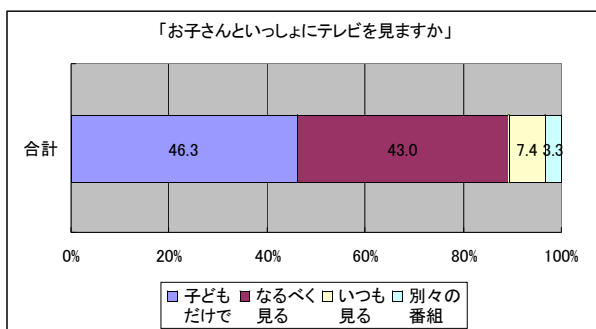
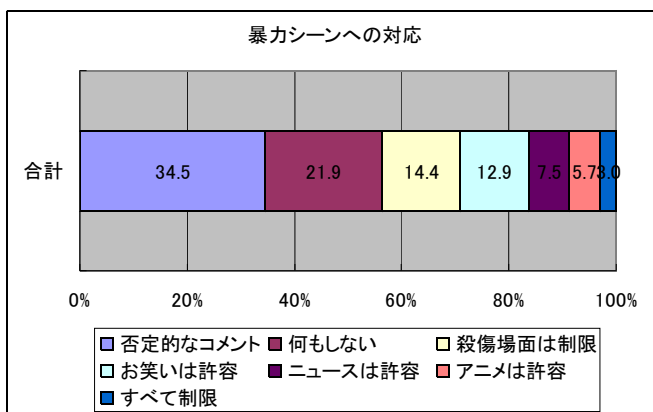


その他、文章や絵での表現、運動遊び、自然の中での遊び等の好き嫌いとはテレビ視聴時間の長短との明確な関係は見られなかった。

保護者の実態

アンケートから浮かび上がった問題点は以下の通りである。

- ・保護者は、子どもたちのメディア接触の実態をおおよそ把握しているようである。
- ・テレビ視聴について保護者が児童に求めているのは、「テレビを見る時間」、「食事のマナー」、「視聴時間の学習への影響」の3点への注意である。
- ・メディアとの長時間接触には危惧を抱いているが、テレビやテレビコマーシャルの中身についてはあまり話し合いなどはされていない。
- ・アニメとバラエティー番組を親子で見る割合が多いが、その中で暴力シーンや人権に係わる会話がどの程度行われているかが問題である。
- ・43%の保護者は、子どもと一緒にテレビを見ようとしているが、2割の保護者は暴力シーンに無頓着である。



それに加え、保護者が子どもだけでテレビを見せている割合が半数近くあり、テレビの情報が鵜呑みにされたり、暴力が親というフィルター無しに子どもに受け取られる危険性がある。その保護者が子どもに適切な声かけをしているかどうか問題である。

4 考察および今後の課題

実態として、学校ではテレビその他のメディアを分析的に読み取ったりメディアを利用して自己表現したりする学習がまだまだ不十分であることが分かった。また、情報教育を単にコンピュータの操作方法やインターネットの利用の学習であると誤解している教師も多いことが分かった。一方、保護者は子どものテレビ等への接触の様子をある程度把握しており子どもの心へ悪影響を与えたりや家庭学習の時間が減るのではないかという危惧を抱いているが、メディア・リテラシー育成という考え方は浸透していない。

テレビ視聴はよい面、悪い面双方を持っており、テレビ番組や TVCM の内容をどのように読み解くかの方法を低学年のうち身につけておく必要がある。テレビ番組やコマーシャルの理解は、適切な教材と教師の介在がなければ効果的には進まない。テレビ視聴を娯楽と捉えず、情報行動であると保護者や教師が考え、情報を取捨選択する力、情報を利用する能力、情報を発信する能力、すなわち情報活用能力を身につけさせることが必要である。そして、インターネットや携帯電話（Webphon）への対応が高学年でもできるように学校、保護者、そして社会がメディア・リテラシー育成に関心を持つことが大切である。

今後は、教師への研修計画や児童への指導計画の作成、教育実践などを通してメディア・リテラシー育成についての啓発活動を行っていききたい。